

宇都宮大学 国際学部国際社会学科

2016年度 卒業論文

過疎地域における地域住民による町づくり

～栃木県那須烏山市横枕青年団の調査をもとに～

指導教官名 中村裕司

学籍番号 130153M

論文執筆者名 吉田正絵

## 要約

本論ではその地域に住む住民自身が住みやすく生きやすい場所にするための「町づくり」について述べていく。「町づくり」は国や自治体の寄付金によってインフラを整備し建物を建設し、街並みを良くすることを連想されがちである。しかし町のハコを作るだけが本当の町づくりとは言えない。今日の現代社会で見失われてきている人と人との繋がりの大切さを今一度見直し、住民が積極的に参加する地域社会の在り方を提案していく。

高度経済成長期以前の日本は地域の中にコミュニティが根深く存在し、日々周りの人間と支え合って生活していた。現代のような便利さがなかった分、コミュニケーションや人の力によって解決してきたことが多くあったのである。高度経済成長を経て都心部は日本を中心に発展を成し遂げていった。この背景には都会の発展をあこがれた若者が地方から流出していき、更に経済を大きくする労働力となっていたのである。

このような日本の発展から生まれたものが、地方の人口減少問題という現在の過疎問題なのである。過疎地域は日本の発展の裏になるべくしてなったのである。しかし、市場に様々なモノが出回り世の中が便利になっていくことで、それまで人と支え合ってやっていたことが市場ですべて完結されるシステムになっていった。またそれはモノだけにとどまらず、居住空間は人口が多い都心部であればあるほどにマンションやビルなどの高層の建物がどんどん増えていき、地方から出た若者が都心部で結婚し核家族化も進行していった。

このような時代の流れによって暮らし方が変化し、人と人との繋がりも変化していった。現代では近所の人と家族のように助け合い、地域の人と何かを共同作業して会話を交わすということがめっきり減ってしまったのである。過疎問題に直面している今こそ、もう一度私達の生活の在り方を見直していくことが必要と考えた。

第1章では過疎問題について歴史的背景をもとに人々の生活の移り変わりについて述べている。また今日の日本において、過疎地域での住民を中心とした地域の良さを活かした活性化の動きが必要となってくることを述べている。

第2章では具体的な経験をもとに、実際に過疎地域で行われている市民活動を具体的に述べて、市民活動における地域のコミュニティの必要性を述べている。人を集めるためのイベントではなく、人が集まり交流して繋がっていくためのイベントに意味があると考えられる。何をするかということが一番大切なのではない。誰が主体的に動き参加し、そこから何を感じ取るか、というところに地域で活動を行うことの意義があり、人と人が繋がっていくのである。

第3章では行政の視点から町づくりについての政策を解説している。現代は町づくりを行政だけが行うのではなく、市民と行政が協働で行う時代になってきている。市民の活動とどのようにして繋げていくか、行政としてできることは何かを考察している。

第4章では地域における市民と行政の協働の必要性を述べている。これからの日本に必要とされる町づくりの在り方を提案する。

## 目次

要約 .....	i
目次.....	ii
はじめに .....	1
第1章 日本の過疎地域問題.....	2
第1節 何もなかった時代の協力し合うコミュニティ .....	2
第2節 高度経済成長以降の農山村地域の変遷.....	3
第3節 現代日本の過疎地域.....	4
第2章 「住民による町づくり」とは～栃木県那須烏山市横枕地区の取材より～ .....	6
第1節 横枕青年団との出会い.....	6
第2節 横枕青年団の活動記録.....	7
第1項 那須烏山市 横枕地区 ホタルまつり.....	7
第2項 栃木県で行われた小中高生向けのリーダー研修会 .....	10
第3項 横枕 花火大会前日準備.....	12
第4項 横枕花火大会 当日 .....	14
第5項 横枕青年団ど田舎祭り .....	15
第6項 忘年会 .....	16
第3章 那須烏山市市役所から見る行政のまちづくりとは.....	17
第1節 那須烏山市とは.....	17
第2節 「自然減」へ進む未来と若い世代の現状.....	18
第3節 人口減少を食い止めるこれからの政策と今度の課題 .....	22
第4章 地域住民による「町づくり」とは.....	26
おわりに .....	29

あとがき .....	31
参考資料・文献.....	33

## はじめに

日本は現在、少子高齢化や地方の過疎問題に直面している。高度経済成長期から核家族化が始まり、人と人の距離が希薄になり高齢者の孤独死など社会に自分の居場所がない人が増加している。この課題に直面し、私が見つけた答えは地域にあるということだった。今日の日本に必要なのは自分の住む地域のコミュニティの中に自分の居場所を作ることである。

過疎問題解決に対して国は力を入れ、都道府県や市町村でも様々な取り組みが見られる。日本各地で地元の特産品を PR するイベントを行ったり、新しい施設を開設して観光産業を生み出そうと試みたり、インフラを整備して便利な暮らしに近づけようとする取り組みが見られた。また、地域によっては子育てや教育に力を入れて移住者を取り込もうとする政策もあった。

しかし一番に目を向ける先はその地域に住む住民である。日本の人口減少の問題を食い止めるといったことは限りなく難しい。地方に興味を持ってもらうためのイベントはその土地の良さを多くの人に知ってもらうことは出来るが、一過性の効果しか見込めずにいる。インフラ整備や建物の建造においても、便利になることはあるが、施設の電気代などの運営費が重なり、逆に地方の財政難に拍車をかけてしまう場合もある。

本論では実際に地域の活動を積極的に行う地域住民の視点と、その地域の行政の視点から地域における「町づくり」を考察していく。具体的な経験談をもとに、地域の人々の関わりと行政との関係性を考えることで見出せるものがあると考えたからである。

第 1 章では高度経済成長期以前から現在に至るまでの日本の地域の在り方を述べていく。歴史的背景から日本の過疎問題がどのようにして引き起ったのかを考えていく。

第 2 章では地域住民による町づくりを具体的な調査をもとに述べていく。栃木県那須烏山市横枕地域に密着取材を行った体験から、過疎地域で活性化に努める横枕青年団の活動を詳しく述べていく。実際の活動や現場の生の声をできるだけ忠実に書き留めていく。

第 3 章では栃木県那須烏山市を過疎地域の具体的な例として挙げ、若者の意識調査から現状分析をして、今後の那須烏山市に必要な政策を考えていく。また市が実際に取り組んでいるプロジェクトを挙げて、今後の課題と解決策を述べている。

第 4 章では地域住民が主体となっていく町づくりの在り方を述べていく。地域の活動は住民と行政の協働が必要不可欠と考え、過疎問題に対してどのように活動を行っていくのか、過疎地域の町づくりの意義を述べていく。

## 第1章 日本の過疎地域問題

今日よく耳にする、少子高齢化という言葉が特に著しく表れているのが過疎地域である。高度経済成長が大きなきっかけとなり、多くの人口が農山村地域から大都市地域へ流動した。働き盛りの若者がいなくなり、人口が激減した農山村地域を過疎地域と呼ぶようになった。これまでも人口減少を食い止めるための手段は多く取り入れられてきたが、この問題はとても深刻なものになってきている。

一方で、現在では大都市から過疎地域に移り住み、有機農業を営む若者もみられる。また、若者の中では都会とは違った自然の豊かさ、人の良さに惹かれる者も出てきている。高度経済成長により人口は都市に集まり日本は大きな経済発展を遂げたが、それまでの日本には“にほんらしい”生活の営みがあったのである。核家族化が進み、隣人の顔も知らないといった人と人との繋がりが薄くなってしまった現代の生活に、本来の日本にはあった人との繋がりと社会の仕組みをもう一度考え直してみたい。

### 第1節 何もなかった時代の協力し合うコミュニティ

現在の私たちの生活に必要なモノで、自分で作り出すモノはとても少ない。現代は食品、衣類、機械など様々のものが市場で購入することにより、簡単に手に入る仕組みになっている。しかし、冷凍食品やレトルト食品、大量生産された沢山の種類の洋服などがなかった時代があった。手袋は糸と編み棒を小売店から買ってきて作り、おかずは肉屋、魚屋、八百屋などで食材を買ってきて作るというのが日常であった。冷蔵庫もなかった時代では生鮮食品は毎日買い物に行かなくてはならなかった。日々、商店街に歩いて買い物に行き小売店で商品を手に入れた。小売店の店主とは顔なじみで世間話をしながら買い物をしていた。お互いの顔を知っているだけでなく、日々のコミュニケーションにより家族構成や職業など様々なことを知っていた。

また自動車がまだ普及していないときは基本的に主婦の交通手段は自転車か徒歩であった。買い物の道の途中に近所の人と出会い、井戸端会議が始まる。お互いの話を共有するだけでなく、日々の生活で困ったことの相談や情報交換など様々な話がそこでは行われる。買い物するときは何をどこに買いに行くか、顔なじみの店主がいる店が決まっているなど、日常の用事はそれぞれの役割を担っている人が思い浮かぶというような、地域の中で特融の人間関係が構成されているのである。このようなコミュニケーションが生み出す地域のコミュニティは防犯、防災面でも役に立ったと考えられる。

防犯面では、地域の人が顔見知りであるので、見知らぬ人がいるとすぐわかってしまい、人目を盗んで盗みを犯すなどの犯罪は難しかったのである。私の実家は石川県の田舎にあるのだが、日中は家の鍵を開けばなしであり、夏には玄関の扉は全て開けて風を家の中に取り込んでいた。近所の人が見回りを回しに来た時や、郵便屋さんが郵便物を配達に来た時、保険会社の人がきたときは、きまって玄関先で「こんにちは〜！」と大きな声で祖父母を呼び、祖母や祖父が出て行ったときには顔なじみであるので、最近の体調を聞き、

会話が弾むのであった。私の祖父母は特別おしゃべりというわけではなく大人しい性格であったが、顔なじみの人が来た時は楽しそうに挨拶や会話をしながら出迎えていた。

防災面では、このようにして築かれたコミュニティがあるので、何かあったときはお互いの状況を把握しやすく、助け合いということが自然とできるようになっている。あの家のおばあちゃんは一人だから様子を見に行き行ってあげよう、足が不自由だから一緒に車に乗せてあげようなど、周りの人が自分の状況を知っているからこそ救助活動がより迅速に行えるのである。

またもう一方で、当時は現代よりはプライバシーというものがなかったという意見もあるだろう。コミュニティを大切に、相互に協力し合う部分がある反面、その強い結びつきのコミュニティから抜けることは難しい。現代の私たちは、みんなが顔なじみであるということは、何か良くないことがあるとすべて筒抜けになり、知られたくない家族内の事情であっても知られてしまうのではないかと思ってしまうだろう。それ以前にマンションの隣人とさえろくに話もしたことがないといった人も中にはいる。都内ではマンション内での交流があったとしても主婦の中で厳しい縦社会が出来上がり卑劣な“いじめ”にあうことさえある。しかし、当時は長年のつながりがあるが故に、言い争いや喧嘩になっても和解する、協力するといったことが行われてきたのである。また、近所に住む友人と一緒に家族と食卓を囲み、お酒を飲みながら語り合うことなどもできていたのである。このような地域のコミュニティでのつながりによって、自分の家庭の内情が筒抜けになるということは、一方で現代の私たちの生活では難しくなっている。時代は変わるものであるが、このような視点から家庭の在り方、地域の繋がり方について客観的に見つめるきっかけになるのである。

現代のような便利なモノがなく、家事一つにしても時間と労働力が今よりも数倍負担があった当時には、その“何もない不便さ”を周りのみんなと協力し合って乗り越えようとするコミュニティがあったのである。では、様々なモノが市場で簡単に手に入るようになった現代はどのようにして形成されていったのか。そして“不便”だった当時の人々の生活がどのように変わっていったのだろうか。

## 第2節 高度経済成長以降の農山村地域の変遷

日本の市町村の制度はそもそも1888年から始まった。総務省の地方自治制度<sup>1</sup>の歴史より、1888年（明治21年）に市制町村制制定が定められた。以下がその内容である。

市町村に独立の法人格を認め、公共事務・委任事務を処理するものとし、条例・規則の制定権付与。市町村会は公民の等級選挙制に基づく公選名誉職議員で構成し、市町村に関する一切の事件及び委任された事件を解決。執行機関は、市にあたっては市長及び市参事
---

<sup>1</sup>地方自治制度の歴史 総務省

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/bunken/history.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.html) 2016/11/15

会（市長・助役・名誉職参事会員で構成）、町村にあたっては、町村長とし、市長は市会から推薦のあった者のうちから内務大臣選任、他は市会・町村会で選挙によって決定される。

この制度は日本が初めて市町村制度を定めたものであった。それまでは集落ごとに分かれていた日本を市町村で区分してようやくまとめることができたのである。翌年の 1889 年（明治 22 年）には大日本帝国憲法が制定し、地方自治法が制定され、東京都制・道府県制・市制・町村制を統合し、知事以下の都道府県職員の身分を官吏から地方公務員に委任した。ここから国や県からの地域整備が行われると、市町村の役場や役所の行政機能は次第に地域産業と強く結びつくようになっていったのである。

日本が高度経済成長期に入り、それに伴い都市開発が進み、農山村地域から人口が大きく大都市地域へ流出した。農山村地域の働き盛りの若者たちは仕事と便利さを求めて都市へ移住してしまっただけである。また途中高度経済成長によって日本は“豊かさ”を手に入れようと、物質的な豊かさを追求してきた。インフラの整備によって家や商業施設が立ち並び、将来の子供たちが生活しやすい環境を整えることができるようになってきた。日本の全体的に生活水準が上がり、人々はさらに便利な環境を求めて都市に集中するようになってきた。また核家族化も進み、日本の地域の中にあつた人と人との“つながり”というものが薄れてきてしまっただけである。

### 第 3 節 現代日本の過疎地域

今日では過疎地域への取り組みを国や県も積極的に行っている。それは総務省の過疎地域に対する制度<sup>2</sup>が制定されたからである。

2010 年 4 月 1 日に過疎地域自立促進特別措置法が施行され、失効期限の 6 年間延長や過疎地域の要件の追加を行うとともに、時代に対応した実効性がある過疎対策を講じるため、過疎対策事業債のソフト事業への拡充及び対象施設の追加を行うなど過疎地域自立促進特別措置法の改正がなされた。

過疎地域自立促進特別措置法は、人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域について、総合的かつ計画的な対策を実施するために必要な特別措置を講ずることにより、これらの地域の自立促進を図り、もって住民福祉の向上、雇用の拡大、地域格差の是正及び美しく風格ある国土の形成に寄与することを目的としている。

過疎地域が、それぞれの有する地域資源を最大言活用して地域の自給力を高めるとともに、国民全体の生活にかかわる公益的機能を十分に発揮することで、住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会を実現することが求められる。

---

<sup>2</sup>総務省 過疎対策

[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm)

1 2016/11/18



現在の過疎地域の現状としては国や都道府県からの寄付金に財源を頼っているのが現状である。観光産業や地域の特産品の開発などを積極的に行ったり、地域を盛り上げようとしている市民団体に支援金を寄付し、地域の活性化に努めている。それらの活動は地域によっては成功して実際に活性化につながっているが、そういった地域は元々観光業や特産品に知名度があり、寄付金によってさらに発展することができたケースが多い。ほとんどの地域では寄付金を活性化につなげることが出来ていないというのが現状である。

市民団体に支援金を寄付するというのは例えば最大3年間などの契約になっているので、その期間を経過すると支援金が止まってしまう。活動費用が賄えない団体は支援金がなくなると活動が立ち行かなくなるという現状も多くある。

地域の活性化に対し活動的に動く市民がいる中、その市民を細部までサポートしきれない行政の現状と、行政のサポートや寄付金に頼りすぎて自立した活動ができないまま団体がなくなってしまうという市民側の現状がある。

## 第2章「住民による町づくり」とは～栃木県那須烏山市横枕地区の取材より～

私は栃木県那須烏山市の横枕地区にある青年団に密着取材を行った。那須烏山市は国の過疎地域になっている。横枕地区<sup>3</sup>はその中でも1995年から2015年までの過去20年間の人口増減では、約19%を記録した。(那須烏山市市役所で行われた総合政策審議会で配布された中間報告抜粋の資料より)この横枕地域に市民が自ら地域を盛り上げようとイベントなどを積極的に行っている団体があった。私はこの団体に約半年密着取材を続け、その活動のはじまりから現在に至るまでの活動記録、現在の活動内容を詳しく述べていきたい。

### 第1節 横枕青年団との出会い<sup>4</sup>

2016年5月17日(火)に那須烏山市に二年間密着して仕事をしている株式会社 FM 栃木でアナウンサーをしている平林葉子氏にインタビューさせて頂いた。主に那須烏山の町づくりについてお話を伺うことができた。那須烏山市には20代から40代の市民が集まった団体がいくつかある。

一つ目は大木須にある里山大木須を愛する会である。この団体は宇都宮大学と協力して古民家を2015年6月1日にオープンした。ここは蛍が有名で蛍のシーズンに夜になると講演に大木須を愛する会のメンバーがガイドをしている。この古民家は一泊一人3000円で床暖、まきボイラー付きで、まきは地元の地域資源を利用している。囲炉裏もあり都会の暮らしではできない懐かしい田舎の暮らしを体験することができる。この古民家ではただ宿泊するだけでなく、田舎の暮らしでやってみたいことを言えば実際にさせてくれる自由な雰囲気があり、例えば流しそうめん、季節の野菜の収穫、山歩きなどである。特にプランとして成立しているわけではないので、やってみたいことを提案してみてできそうなことであるなら、地元の人がサポートしてくれるのである。

二つ目は横枕地区にある青年団である。この青年団は地元の30代から40代の住民が中心となり今では約20人が活動している。またメンバーの50代や60代の上の世代のまだ体の元気な定年後の人たちや、市も活動の手伝いをしている。この団体はこれまでイベントを数多く行っているが、すべて自分たちで考えて運営をしているところが他にはない魅力である。5月の大型連休には田植え前の水田を利用した「どろリンピック」を開催している。地元の人だけでなく県外からも参加者が集まり、参加する人も見学する人も楽しい企画になっている。

またそのほかに6月には蛍まつり、婚活パーティー、夏には花火大会も行っている。花火大会は地元の人が花火師の免許をわざわざ取得して、業者に頼まずに自分たちの力だけ

<sup>3</sup>2016年11月24日に那須烏山市市役所で行われた総合政策審議会に総合政策審議会委員として出席した際に配布された中間報告抜粋の資料より

<sup>4</sup>2016年5月17日の株式会社 エフエム栃木(通称レディオベリー)の平林葉子氏にインタビュー

で行っている。毎年少しずつ質が上がっていくところも見どころである。市の助成金や市内からの協賛金でこれらの費用を賄っている。すべて地元の人の手で作り上げるこのイベントが成り立つのは幾度となく繰り返される会議と少ないお金を最大限に使う知恵と団結力があるからである。またこれらのイベントは外部からも参加者が来るが、定住などに直接つながらなくとも、まずは那須烏山市の良さを知ってもらうという目的で行われている。

他にもたくさんお話しを聞かせて頂いたが、今回 H 氏の紹介で里山大木須を愛する会と、横枕地区の青年団の活動に今後参加させていただき、実際に地元住民が行う町づくりを体感したいと考えた。

## 第 2 節 横枕青年団の活動記録

### 第 1 項 那須烏山市 横枕地区 ホタルまつり <sup>5</sup>

平林氏に紹介して頂き、栃木県那須烏山市の横枕青年団の活動にボランティアとしてお手伝いをさせて頂けることになった。ホタルまつりの前日に横枕青年団の事務局長を務めている澤村さんと電話させて頂き急遽参加が決定したのだが、快く迎え入れてくださった。当日私は知り合いも土地勘も何もないままに、指定された烏山駅に到着した。すると黄色の横枕青年団の T シャツを着た 40 歳くらいの男性が私を車で迎えに来て下さっていた。気さくで話しやすく、冗談が上手な方であったので私もすぐに打ち解けた。ホタルまつりの会場までは車で 15 分ほどのところにあり、車中では私が横枕青年団を知ったきっかけやどうして参加することになったのか、どのような卒論にしたいのかという話ではじまり、横枕青年団の現状を聞くことができた。初めて知り合い、右も左もわからない私の話を真剣に聞いて下さり、真剣に回答して下さった。彼は横枕青年団の問題として約 26 人いるうち、毎回の話し合いや準備に来る人はいつも同じ幹部のメンバーになり、当日だけ手伝いに来る人が多く、特に年齢が若い人ほどそのような傾向があるということであった。もちろん当日の手伝いだけでも若い労働力は大変助かるのではあるが、準備という地味な作業もイベントを成功させるために必要なもので、幹部はイベントが成功するようにいつも念入りに事前準備をしている。

会場について私は準備に追われていた横枕青年団の方々に挨拶をした。みなさん笑顔で気持ちよく挨拶をして下さり、事務局長の紹介により私は準備のお手伝いをさっそく始めることとなった。お手伝いをしながら、横枕青年団の方々と会話をしてコミュニケーションをとっていった。20 代から 40 代くらいまでの男性ばかりだったがみなさん話しやすい方ばかりで、初対面の学生の私に興味を持って下さりたくさん質問などをされた。私はボランティアに来ることになったきっかけや、この活動を機にどんどん横枕青年団にかかわっていきたいことを話した。学生が一人だけで知り合いもいないところに卒業論文の研究のためにきたというのがとても驚かれたが、すごいなあがんばれとみなさんが応援してくだ

---

<sup>5</sup>2016 年 6 月 11 日に那須烏山市横枕地区で行われたホタル祭りのボランティアをした経験より

さった。

準備はホテルまつりの会場になる消防団の建物の中にある機材を運ぶところからであった。会場から少し離れたところに運ぶ物は車で搬送していたのだが、それを手伝ってくれていたのは横枕青年団の方々の父親世代の方々であった。いつも当日のお手伝いに運動を兼ねて手伝いに来て下さるということであった。世代を問わずみなさん明るく元気でいい人たちばかりであった。

お笑いライブや子供たちのダンス、歌手による演奏などが行われる舞台はレンタルしたトラックの荷台である。紅白幕を取り付け、ポスターや横枕青年団の旗で飾り付けしていく。ステージの前には観客席用のパイプ椅子を並べ、またその隣にはブルーシートを敷いて、座って楽しめるように足の短い長い机と座布団を設置した。屋台はテントを組み立て、揚げ物用の機械や鉄板を準備し、フランクフルト、ポテト、唐揚げ、焼きそば、かき氷、など様々なものが用意された。ホテルまつりということだけあり、お祭りの開始時間は 4 時からとなっていた。しかし、朝早くから炎天下の中、横枕青年団はみんなで協力しながらもくもくと準備を続けた。私は最初、何からすればいいかわからなかったが、物を運ぶことや屋台の商品や値段のポップを張ったりしてお手伝いをした。

4 時に近くなりお祭りの開会式が始まった。お笑い芸人の上原チョー氏が司会を務めていた。開会式では事務局長の計らいで、私は壇上に上がりお祭りに来ていた方々の前で自己紹介をさせて頂いた。そのあと、私は受付の業務を任された。受付をするのは議員や企業の来賓、この日の 4 時から昆虫愛護団体の方々の指導を受けながら自然の中で虫を捕まえるというイベントがあったので、その受付であった。参加者は親子連れが多く、市内だけでなく宇都宮市など市外から来ている人や、県外からもはるばる来ている人もいた。最初に受付業務をしたことによって運営側がどのように対応しているのか、どこから人が来ているのかを知ることができた。

受付業務が落ち着いてきたので、私は次にジュースの売り場に配属された。虫取りから帰ってきた子供たちなどでお店は大盛況であった。お酒類も飛ぶように売れ、休みを取りながらも青年団はどの持ち場の人もずっと働いていた。ステージでは子供たちのダンスや太鼓のお囃子に始まり、プロの尺八奏者の福田氏や駆け出し演歌歌手のライブが行われた。彼らにはファンが追っかけてきており、県外からたくさんファンが来ていた。暗くなってくると、街灯が少なく山に囲まれている横枕の土地に尺八の音がきれいに響いた。日が暮れるにつれて、ホテルを見るためにお客様がさらに増え、横枕青年団は駐車場の誘導にも対応していた。夜 8 時ごろに私はせっかくきたのだからと、ホテルを見ておいでと言われ、会場を少し離れ、人の流れについていき、ホテルが多く出没するエリアに足を踏み込んだ。会場から離れるごとにホテルの数は増えていき、1 メートル間隔に何匹も発見することができた。街灯の少ない暗闇の中でホテルが何匹も飛び交う様子は、本当の自然の中でしか見られない光景だった。道行く人たちはこの日を楽しみに今日のお祭りに来たのだなと理解した。

横枕青年団は2010年に7人で結成された。結成のきっかけは毎年6月ごろになるとホテルを見るために多くの人を訪れることから何かできないかと思い立ったことだった。ホテル祭りとして屋台や出し物、昆虫採集などのイベントを行うと多くの客を訪れるようになった。そんな青年団の思いは横枕を日本全国に大きく広めたいということではなかった。彼ら自身、自分が子供だった頃にお祭りや行事などを体験して思い出を沢山作った記憶があった。近年の過疎の影響によりそういったイベントの数が減り、本当に子供が少なく活気がない地域になってしまっていた。

青年団結成をきっかけに、地元の子供たちに楽しい思い出、いろいろな体験を是非してもらいたいという思いから現在に至っているという。参加者は烏山市内はもちろんのこと、市外や県外からも人が訪れていた。

青年団は30~40代の約20人で結成されている。イベントは5月の泥リンピック、6月のホテル祭り、お見合いパーティー、8月の花火大会などがある。参加者には国会議員の顔ぶれもあった。中には泥リンピックで田んぼの真ん中で自転車をこいで泥だらけになった議員もいたという。ホテル祭りをみて感じたのは参加者だけでなく青年団やボランティアの方々も楽しんでいただということである。地域のイベントはマンネリ化してきて役員をまかされた人がやらざるをえないような雰囲気があるのでは、と小さいころの自分は感じていたのだが、青年団や関係者の方々も自ら楽しんでやっていた。また青年団の親世代のメンバーも会場の設営の準備から手伝いをしていた。高齢者の方々も体を動かし、一つのイベントに携わることで地域の中で連携が生まれていた。

イベントの最中も青年団の中にはいつもお世話になっているお年寄りや、歩くことでやっとなお年寄りに対してそばに付き添い、屋台の買い物のお手伝いをしたりしていた。過疎地域で少ない人数だからこそ全員の顔を把握していることで世代関係なくみんなで支えあっていた。実際に聞いてみると、人口分布が世代でまとまっていることが特徴的といえる。祖父の世代、親世代、子供の世代と三つの山になっている。その間の世代が極端に少ないのだが、世代ごとにまとまって人数がいることにより、より団結力が生まれやすいのではないかとのことだった。

現在の課題としては青年団の初期メンバーの40代と、30代の若い世代での温度差があることである。イベントの準備や当日、片付けはみんなで協力してやっているのだが、前々からの話し合いには若いメンバーの参加率が悪いために、コアメンバーだけで話し合いをしているという状況なのである。

それに対し、青年団には近年女性も参加している。ホテル祭りの代表は24歳の地元の金融機関に勤める女性が担っていた。男性ばかりの青年団だったが、イベントの数が増え参加者が増加していくなかで女性の目線での提案も必要だろうということから、女性も参加するようになったのである。ホテル祭りにスタッフとして参加していた女性は二人で、浴衣をきて青年団の雰囲気をより華やかにしていた。

ホテル祭りにはトラックに紅白の幕を付けた特設ステージがある。そこでは栃木県真岡

市出身で 2001 年から青年団とかかわりのある吉本工業のお笑い芸人の上原チョーさんと、五年ほど連続で出演しているプロの尺八吹奏者の福田大輔さんが芸を披露した。上原チョーさんは栃木のラジオで仕事の募集をしたところ、横枕青年団の代表から電話が来て、それ以来のお付き合いということだった。福田さんにもお話を聞いたところ、福田さんは年間 200 日、全国を飛び回って演奏会をしている多忙な方なのに、毎年ホテル祭りとは花火大会には尺八を披露してくれているということだった。福田さんは少しでも横枕の人々の笑顔に貢献できたらと言っていた。

青年団が規模を大きくする意欲があまりないのは、あくまで地元の子供たちのためであって知名度をあげたいわけではないこともあるが、青年団のメンバーが 20 人程度なので大きすぎる規模には対応しきれないということと、ホテル祭りであれば観光客が多く来すぎてホテルが飛んでくれないことや、駐車スペースの不足があげられる。

## 第 2 項 栃木県で行われた小中高生向けのリーダー研修会<sup>6</sup>

栃木県主催の「とちぎ ユースボランティア研修 in 太平」という、栃木県内の小中高生向けのリーダー研修会が 8 月 9 日から 10 日にかけて一泊二日で栃木市にある栃木県立太平少年自然の家にて開催された。この研修の趣旨は、「中高生や高校生という若い世代に対し、自分たちが「とちぎの将来を担う」という意識の醸成を図るとともに、オリンピック・パラリンピックの開催を契機として、人と人が互いに支え合い、多様なあり方を相互に認め合える共生社会の形成を目指し、ボランティア等の地域（社会）貢献活動への理解と関心、さらに実践力を養う研修をとおして、地域活動リーダーとして、平和でよりよい社会を構築する次世代を担う若者を育成する。」（平成 28 年度 とちぎユースボランティア研修会 とちぎユースボランティア研修会 in 太平 開催要項 趣旨より）というものである。今回この研修に横枕地区の青年団が地域を引っ張るリーダー的役割の代表として講師ということで声がかかったのである。

当日、私は青年団の団長、事務局長、事務局長補佐の三人とプレゼンターの曾根氏と共に現地に向かった。私は今回の発表には以前行われたホテル祭りの外部参加者として感想を述べる役割を頂き同行させて頂いた。発表前の控室で青年団のメンバーが自分たちの活動を熱く語っていた。自分たちの活動は自分たちだけで成り立っているとは考えない。沢山の企業や行政、地域の人々などに支えられて今の青年団があるのだと言っていた。話の流れは青年団の家族の話になり、現在彼らの小学生くらいになる子供たちが、青年団の話し合いの場に行きたいと言ってくると言っていた。小さい頃から青年団の活動を当たり前のように見てきていて、自分も大人になったら青年団に入りたいというまじになったという。

また、子供たちが大人になったときに青年団にもし入らないことになっても、横枕で

---

<sup>6</sup> 2016 年 8 月 10 日に栃木県で行われた小中高生向けのリーダー研修会の合宿に横枕青年団の方と外部参加者として出席し、子供たちと交流した経験より

人たちの背中を見て育った時に、何か彼らの中で青年団のこれまでの活動が花になればと語っていた。そしてそれを語る現役の青年団の彼ら自身もまた、親の背中をみていたからこそ、今の活動に繋がっているのだと言っていた。彼らの活動がここまで大きいものに成功した秘訣を教えてもらった。それは人を引き寄せるのではなく受け入れていくことである。横枕地区の住民だけでなく、県内外からくる青年団に興味を抱いてくれた人を快く青年団に招き入れ、人を受け入れてきた。私も受け入れてもらった一人である。彼らは自分達の活動を更によりよくしていくというよりかは、周りに人が集まってきてみんなの力で活動がさらに活気づいているといった方がしっくりくると思う。またこの話の流れで団長が横枕出身ではないことがわかった。団長は結婚した際に横枕に来たという。

縁があって横枕青年団に入ることになり、ずっと団長としてやってきていた。彼は横枕の福祉施設の社長として働いている。団長は「俺が団長だ」というような大きい態度を取らず、むしろ後ろからみんなを見守っているというような人である。彼は横枕青年団の一員として、そして団長として活動させてもらえるのがうれしいと言っていた。彼がどっしりと横枕青年団を守っているというようなそんな人なのである。会社の社長でもある彼が言っていたのは、社長だからこそ一番に働かなくてはいけなく、一緒に働く社員を一番近くで理解してあげないといけないということである。彼は普段の仕事も社長室にいるのではなく、社員と同じようにして働いている。社員とは仲が良く、職場には笑顔が絶えないという。彼のこの人柄の良さと広い心が横枕青年団を一つにまとめてきたと言えよう。

控室にいた私たちに声がかかり、子供たちがいる教室のような部屋に案内された。そこには30人ほどの子供たちが着席していた。私たちはこの合宿の主催者の星さんに紹介され、子供たちの前に立った。

はじめはスクリーンを使って曾根氏が横枕青年団の紹介をした。その後子供たちが6人ずつくらいのグループにわかれ、私たちもグループにバラバラに入りグループワークをした。大きな模造紙に子供たちが未来の自分たちの住む地域に自分ができることや、どんな地域が理想なのかを付箋に書いて貼っていくというものである。みんな思い思いの単語を付箋に書いて貼っていった。私は団長と同じグループに入り、子供たちが話しやすいように団長と二人で司会進行をした。グループワークをしているときに高校生の女の子二人に団長と私が横枕青年団の活動について聞かれたので話していた。近日中に花火大会があるので興味がある人は是非遊びに来てほしいと言い、チラシを二人に渡した。

グループワークが終わり、私たちは帰路についた。途中で蕎麦屋に寄り事務局長と私だけビールを飲みながらみんなで蕎麦を食べた。その数日後、私と団長と同じグループだった女子高校生二人から事務局長のところに、次のイベントの花火大会にボランティアとして参加したいという連絡があった。

青年団は20代から40代までの若い層で構成されている。彼らは青年団の活動をサポートしてくれている横枕地区の中老年の層を青年団に引き付けたこともまた大きな彼らの活動の成果とも言っていた。青年団がまだ結成されて間もない頃に、若い彼らの活動をみた

中高年の層が応援してくれるようになったという。そしてイベントごとに準備などを一緒に手伝ってくれるまでになったのである。また、彼らの中には自分の息子が青年団であるから手伝うといった人もいれば、そうでなくても青年団の活動に共感した人もたくさんいるという。これもまた、彼らの人を選ばずに受け入れるという姿勢の賜物である。

また、青年団の中では、親にはあえて情報を通達しないという決まりがある。それはあえて青年団の団員に親に知らせておくようにとっておく。これで親子のコミュニケーションを図り、話題づくりにしてほしいという意図がある。またこの伝言が親子間でできていなかった家庭は、必然的に情報が共有されていないと周りに知られてしまう。その後その過程ではコミュニケーションをとるようになると事務局長は話していた。家族の中に共通の話題が生まれることで、家族間のコミュニケーションが取れる。これもまた青年団の中高年齢層と彼らの間の深い絆づくりに必要なことだったのである。

青年団の活動の広報で家庭にチラシを配布するときに、一人暮らしの高齢者の家にも訪れるので安否確認も地域全体できている。また彼らは会話の最中、しきりに「夢」「理想」を持っているべきと答えた。

彼ら自身、普段はそれぞれの職場で働いていて家庭を持っている人、社長として一つの企業をまとめる人などバックグラウンドはさまざまである。その人たちが同じ地域に住み、こうして青年団という活動を通してお互いに支えあって生きているのだと私は感じた。

### 第3項 横枕 花火大会前日準備<sup>7</sup>

朝の8時から花火大会の前日準備に参加させてもらった。前日準備は平日の金曜日のために人がとても少なかった。参加人数が10人に満たない中みんな必死で準備を行い、朝早くから、夜の8時頃まで仕事終わりに駆け付けたメンバーも一緒に作業をした。もちろん最初から参加している人もいる。その人達は仕事を休んできている。今日来ていたほとんどが幹部メンバーであった。

前日準備ということで会場設営がメインの日となった。場所は現在利用されていない公営の温泉の跡地である。温泉の建物は出演者の控え室と、大広間は屋内の客の休憩所となった。

午前中は座布団をすべて天日干しして、テントや机を組み立て屋台や休憩所の設置をした。また道路に横枕花火大会の旗を立て、花火の際の進入禁止区域の看板の設置をした。午後からはトラックの二台のステージの設置、ステージ前の椅子の設置、電気器具の配線や確認を行った。また子供先着100名に配る手持ち花火を1セット5本で作った。

準備中にたくさんお話しを聞くことができた。幹部のメンバーとはしては青年団が設立してすぐからずっと入れ替わりなく同じメンバーが幹部をやっていることに、青年団が大きくなるほどに不満に思う人がでるのではないかという不安があった。

---

<sup>7</sup> 2016年8月12日に那須烏山市横枕地区で行われた花火大会の前日準備に一日参加した時の経験より



また一方で三人の幹部ではないメンバーとお昼を食べに行ったときにはそのようなことは何も不満という感じではなく、むしろお祭りや青年団の活動の規模が大きくなりすぎていることに、人数不足や地元の人のための活動だったのに地元の人がもてなす側になってしまっていることを不満にしている人もいた。また、栃木市出身で結婚を機に婿養子として烏山市にきたメンバーは、この活動に参加できてよかったと振り返る。高校卒業後に就職をして、子供のころは参加していた地域の活動に全くかかわりがなくなってしまっていたと言い、さらに地元から出て働いているためになおさらそういった機会を失ってしまったそうであった。横枕青年団が結成された丁度良いタイミングで横枕に移住してきたので、青年団には設立当初から関わっていて、メンバーになることが出来てよかったと振り返った。

青年団が出来たきっかけは、子供のころは当たり前のようにあったイベントが年々少なくなってきたいて、なにかみんなでやろうということになった。横枕は6月頃になると蛍が沢山現れ、それを見るために市外からも人が訪れていた。横枕に住む人たちにとっては無数の蛍が川沿いに飛び交うのは小さいころから見慣れた風景であったが、わざわざ遠くから人が来ているというところに注目して何かやろうということになった。最初はジュースを売ったりして、子供たちに花火をさせてあげる程度にしか考えていなかったという。この活動が次第に大きくなり、現在のホタル祭りになったと教えてもらった。

またもう一人烏山市が地元ではなく青年団として活動している25歳の男性がいる。事務局長の澤村さんと同じ職場で、最初は花火大会に遊びに来いと言われ会社の同僚と訪れた。しかしその日は雨で次の日に延期になってしまい、人手が足りず手伝ってほしいということでスタッフとして手伝ったことがきっかけで、それ以来青年団のボランティアメンバーとして活動しているということだった。彼の住まいは那須なので毎回1時間ほど車を飛ばして来ていた。横枕青年団には出身も違い、住むところも違い、ただ活動や人に惹かれて毎回手伝いに来る人が沢山いるのである。

お昼休憩のあとはまた準備に戻り、次は設置した会場にポップやチラシなどの飾りつけの作業に入った。私は売り場のポップの貼り付けと、当日に横枕青年団のオリジナルTシャツを販売するので、そのサンプルの飾りつけをした。舞台ではポップや青年団の旗が飾り付けられた。また、当日は車で渋滞してしまうため、花火の近くに車を止められないように駐車禁止の看板を置くなどして交通整理の準備が行われた。

この日、日が落ち始めたころに帰宅した。帰りは青年団のメンバーに車で駅まで送迎して頂いた。まだ残っていたメンバーは発電機がその後運ばれてきて、通電するかの確認作業を行っていたため帰りは夜遅くになったようであった。

#### 第4項 横枕花火大会 当日<sup>8</sup>

花火大会は今年で第6回目となった。当日は午後4時から開幕だが、スタッフは午前7時頃には集合して準備にいそしんでいた。当日はたくさんのボランティアが応援に駆け付けた。青年団の親世代の方々や市役所の職員がプライベートでボランティアとして手伝いに来ていて、様々な関係で青年団と繋がりのある人が来ていた。私は横幕青年団 T シャツを頂いたのもそれを着ての参加となった。全員配置がそれぞれ決まっていて、青年団員はインカムが配布された。花火祭りは年間のイベントの中で一番集客を見込める。この日は宇都宮市の花火大会と同日だったため集客が懸念されていた。

準備をしていると、本章第2項の栃木県で行われた小中高生向けのリーダー研修会に参加し、グループワークの際にぜひボランティアをしたいと言っていた女子高校生の二人が本当に当日の12時頃に手伝いに来てくれた。事務局長は丁寧に青年団員に二人を紹介し、二人は屋台の売り子を任されることになった。

午後4時頃になり人が少しずつ増えていき、宇都宮市の花火大会と重ならなかった昨年よりは集客は見込めなかったものの、数百人の人が来場し、青年団とボランティアは忙しく働いていた。この日私は青年団員の女性とボランティアできていた二人の那須烏山市役所の職員の方と受付をした。ステージ横の本部で来賓の対応と子供花火の受付に努めた。

今年の花火大会のメインの司会進行役はお笑い芸人の上原チョー氏の先輩にあたる井上マー氏と本章の第1節にて紹介した平林葉子氏であった。井上氏は宇都宮花火大会からも司会として声をかけられていたが断り、横枕青年団の花火大会の司会をしてくれた。彼は声がかかったのは横枕青年団だったから特に深い意味はないと言っていたが、本部で見ると彼は他の後輩のお笑い芸人が頑張っている姿や子供達の姿を本当に微笑ましそうに見守っていた。また地域のイベントにラジオのアナウンサーとして活躍している平林氏のアナウンスは、イベント全体の雰囲気を作り上げていた。

花火が打ちあがるまでの間、ステージではかき氷早食い対決やダンススクールに通う子供達の発表、栃木県出身の駆け出しの歌手によるライブ、プロの尺八奏者の福田氏による演奏会などが行われていた。またお笑い芸人たちによる漫才で会場は盛り上がり、午後8時になり花火が打ちあがった。

横枕で上がる花火は一味違った。会場は周りが山に囲まれていて、街灯もほとんどない真っ暗な場所である。その空間ですぐそばに上がる打ち上げ花火は、まるでLEDライトのように一つ一つの光が鮮明に見え、散っていくまでわかるほどであった。横枕青年団の関係者はどんなに迫力のある花火よりも一番綺麗に花火が見ることが出来ると言っていたが、本当にその通りであった。

花火大会は開催当初は子供達のために手持ち花火や市販の打ち上げ花火をするような小さなイベントであった。しかし事務局長が仕事の際に仲の良い営業先に横枕青年団の活動

---

<sup>8</sup> 2016年8月13日に那須烏山市横枕地区の花火大会当日にボランティアとして参加した時の経験より

の話をしているときにそれは変わったのであった。偶然、営業際でプロの花火師の知り合いを紹介してもらえることになり、青年団の活動に共感を抱いた花火師が資金繰りが大変な青年団に通常より低い価格で横枕青年団の花火を引き受けてくれることになったのである。そして現在地域の人はもちろんのこと、市内外から多くの人を訪れるようになったのであった。

後日、ボランティアに来てくれた女子高校生が通う市内の高校から事務局長に、是非これからも学生にボランティア活動をさせてほしいという話が舞い込んだ。現代社会において高校生が地元の地域の人と積極的にコミュニケーションをとるということが教育に必要と考え、横枕青年団に連絡したのだという。参加した女子高校生二人もいい経験になった、楽しかったということでまた参加したいと言っていた。このようにして地域活動と教育機関が繋がり、若い世代が自分の地元の良さを知っていくことが出来ると実感した。

## 第5項 横枕青年団ど田舎祭り

「横枕青年団ど田舎祭り」は秋に横枕で開催されるお祭りである。場所は花火大会と同じで温泉の跡地で行われた。このお祭りでは、屋台だけでなく、横枕青年団の団員と栃木住みます芸人の上原チョー氏がパスタを作りお客さんに食べてもらって対決するというパスタ対決と、駆け出しの若手歌手2名のライブ、お笑い芸人によるお笑いライブを行った。

シンガーソングライターの高野恭平氏はこの日に合わせて自身初となるシングルを発売した。どうしても地元からスタートさせたいという彼の気持ちから決まったことであった。

私は屋台の売り子の配置を任された。売り子は私ともう1人27歳の若い男性のK氏であった。彼は出身が愛知県であり、大学で上京し、その後保険会社の法人向けの営業職に就いている。約5年前に転勤により宇都宮市に来たのだった。横枕青年団との出会いは事務局長と仕事先で知り合い、横枕青年団のボランティアとして誘われたということだった。仕事の都合がついたときはボランティアとして手伝いに来ているという。彼は来年度にはまた転勤になるので横枕青年団にかかわるのもあと少しだと寂しそうな表情をしていた。

また、今回のイベントには花火大会にもボランティアとして参加していた女性の市役所の職員の方が2名来ていた。会うのが二回目であることと、年も近いということで仲良くなり、青年団のほかにも市内には活気のある団体が沢山あると教えてくれた。

パスタ対決は全部で5種類のパスタをお客様に食べ比べしてもらい、好みに合ったパスタに投票してもらおうというものだった。青年団のメンバーもまかないとして5種類のパスタを食べ比べしたがどれもとてもおいしかった。

ど田舎まつりは青年団の屋台のほか、市内の農家や各種企業の展示や出店がなされており、中でもパワーショベルの展示は子供が大変喜んでいて。この日は風が強くテントが風に煽られて飛んでしまいそうなところを、実際にショベルカーを移動させてテントの頂上にスコップの部分をつっかける形で押さえつけると、子供たちはさらに興奮したようであった。

## 第6項 忘年会<sup>9</sup>

私は横枕青年団の忘年会に呼んで頂いた。忘年会は旅館で一泊二日にて行われた。午前中に奉仕作業を行い午後に旅館に行くということだったが、当日は雨が降ったため奉仕作業は中止になった。私はJR 烏山駅に青年団のメンバーから迎えに来てもらうことになっていた。私の電車の都合上、集合時間より1時間ほど早く駅に着いてしまったので、迎えに来て下さったメンバーの方が気を利かせてみかん狩りに連れて行って下さった。しかし雨のためにみかん狩りは出来ないということだったので、ネットに入ったみかんをお土産として買うことになった。偶然にも私達が訪れたみかん農家さんが横枕青年団の団長の親戚と言うことが分かり、みかんをおまけしてもらえることになった。ここでとれるみかんは日本で最も北で採れるみかんで味は他のものより酸っぱかった。

宴会の前に青年団のミーティングがあった。2016年度のイベントを振り返り、来年度のイベントの確認とイベントごとの責任者を決めた。また役職の変更などもその場で確認が行われた。来年度のイベントは幹部が事前に日程や内容などを考え提案書を作成していたのでそれをもとに話し合いが進められた。宴会は事務局長の司会進行で行われた。お笑い芸人さんが4人きていたのでネタを披露し一同は盛り上がった。また横枕青年団になにかしらで活躍人にそれぞれ感謝状が贈られた。半年ほどしか関わっていなかった私も学生のボランティアとして貢献したということで感謝状を頂いた。振り返ってみれば初めて横枕青年団と出会ったときは私一人で出向き、知り合いが一人もいない状態から手探りでの調査だった。だが半年間、イベントや事前打ち合わせや準備のお手伝いをしていくうちに横枕青年団のみなさんと人生相談できるほど仲が良くなっていた。

感謝状は基本的に幹部以外のメンバーに贈られた。私は横枕青年団に一体感のある秘訣の一つは、メンバー全員を大切にすることであると実感した。宴会の雰囲気は青年団が一人一人「ここにいてよかった」と心の底から思えるような雰囲気に包まれていた。各地でイベントに出向き仕事をしているお笑い芸人の方々も口を揃えてこんなに素敵な地域はないと言っていた。彼らは地域のイベントに呼ばれて仕事をこなすというイメージが大半で、忘年会を行う地域も少ない中で、横枕青年団は忘年会でしっかりと関係性を築いていることに感動しているという風に語っていた。

---

<sup>9</sup>2016年11月19日、20日の那須烏山市横枕地区の横枕青年団の忘年会に呼んでもらった時の経験より

### 第3章 那須烏山市市役所から見る行政のまちづくりとは

第3章では那須烏山市市役所の行政の視点からの町づくりの政策を述べていく。行政が住民の声を受けてどのような政策を建てているのか解説し、課題点も挙げていく。

#### 第1節 那須烏山市とは

2005年10月1日に南那須町と烏山町が合併して那須烏山市になった。那須烏山市には日本全国にこそ知れているわけではないが、多くの魅力がある。まず一つ目は、山あげ祭である。450年以上の歴史を誇る野外歌舞伎である。これは彫刻が施されたおみこしや歌舞伎の大屋台（山車）を大人数の男たちで運び、3日間で10箇所の場所で野外歌舞伎をするというものである。6地区に区分けされていて、毎年7月の第4土曜日を含む3日間に各地区で交代しながら行われている大きな行事である。

また江戸川にかかる高さ約20メートル幅約65メートルの竜門の滝も観光名所である。この滝の中断には、男釜（おがま直径約4メートル）、女釜（めがま直径約2メートル）と呼ばれる竪穴がある。第一次産業が盛んで、お米やそばの生産量が多い。那須烏山市を歩いていると通りには蕎麦屋を多く見かけるのもこのためである。また東力士という名前の日本酒も有名である。これは洞窟が酒蔵になっており、洞窟の中は一年中涼しい温度が保たれている。またこの洞窟でライブなどの活動も行われている。また烏山和紙も有名で、近代化遺産に指定意されている和紙会館もある。

那須烏山市はJR烏山線が通っていて、鴻野山駅、大金駅、小埜駅、滝駅、烏山駅の5つの駅がある。烏山市役所は烏山駅から徒歩15分程のところにある。

2016年4月25日にJR烏山線を利用して滝駅に訪れた。電車はワンマン運行なので一時間に一本電車が来るという形になっている。滝駅は無人駅で券売機もない。下車の際に料金または切符を車掌に渡すのである。個人的にワンマンの電車に今まで乗ったことがなかったもので、降りるときは車掌の後ろの扉からしか降りられないこと、料金を車掌に直接支払うこと、乗り遅れている人がいたら少し進んでいても止まってくれることに、現代では味わえないものがあると感じた。宇都宮駅を出て30分ほどで見えてくる緑の景色にリラックスした。

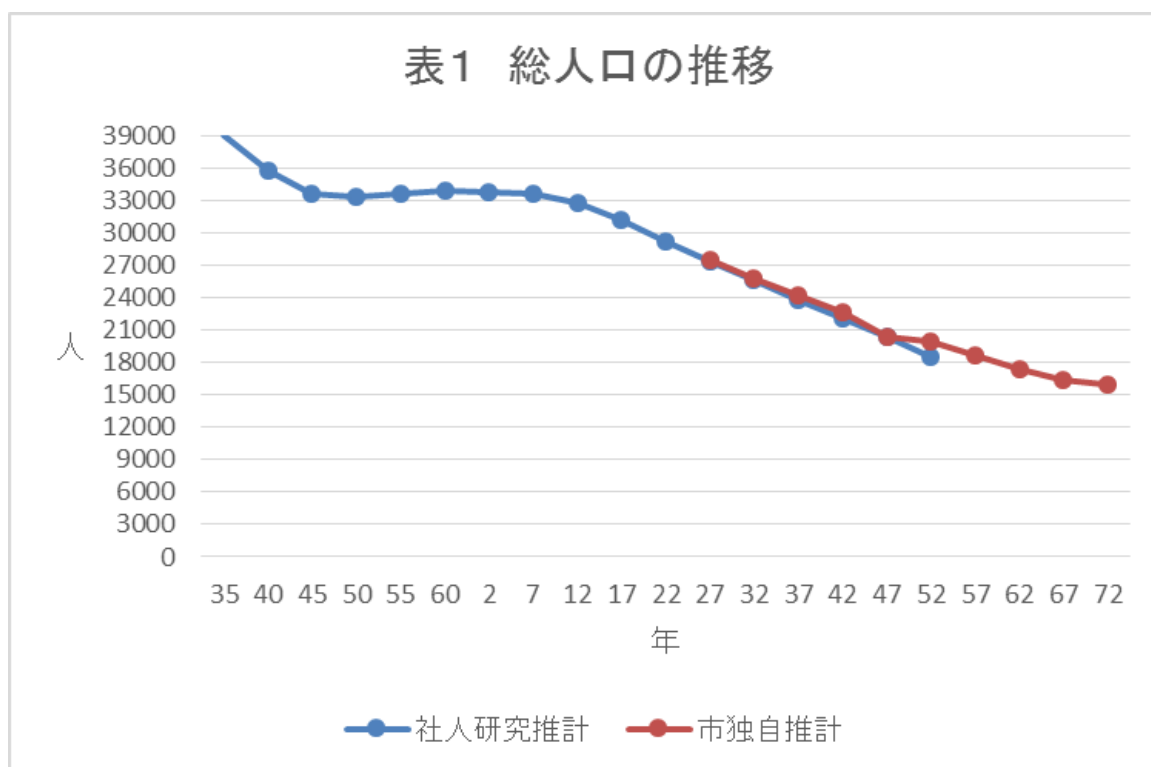
鴻野山駅や大金駅は利用者が多く、駅付近も住宅やお店が見えにぎわっている雰囲気を感じ取れたが、滝駅は無人で降りる人も自分しかいないという状況だった。駅から道なりに歩いたが、車がたまに通るだけで通行人はほとんどいなかった。田んぼが一面に広がっており、その周りに住宅があるといった形だった。田んぼの真ん中には大きなこいのぼりが泳いでいた。住宅の中でも家の屋根から地面までロープが引っ張ってあり、五月に訪れたので小さめのこいのぼりが何匹も泳いでいた。

駅と住宅の間に田畑が広がっていた。その住宅の向こう側には大きな車道が走っており、多くの車が行き来しているのが確認できた。滝駅の付近は山に囲まれていてコンビニも見当たらなかったのが住民は基本的に車で移動していると分かった。

## 第2節 「自然減」へ進む未来と若い世代の現状

過疎地域において少子高齢化が進み人口が年々減少していることは「自然減」へと向かう一途をたどる。地域活性化の取り組みにおいてはこのような現状を止めるということは現実問題としてほぼ不可能なことであり、私達に今できることは如何にして人口減少にスピードを緩めるかということである。実際に那須烏山市総合政策課が行う総合政策審議会では、人口減少に対して大きな危機である今、この流れを少しでも緩めるために「まち・ひと・仕ごと創生総合戦略」というものが打ち出されている。外部から人を呼び込む戦略というよりかは、現住の那須烏山市民の声に耳を傾け若い世代の流出を食い止め、住みやすい市にしようとするものである。

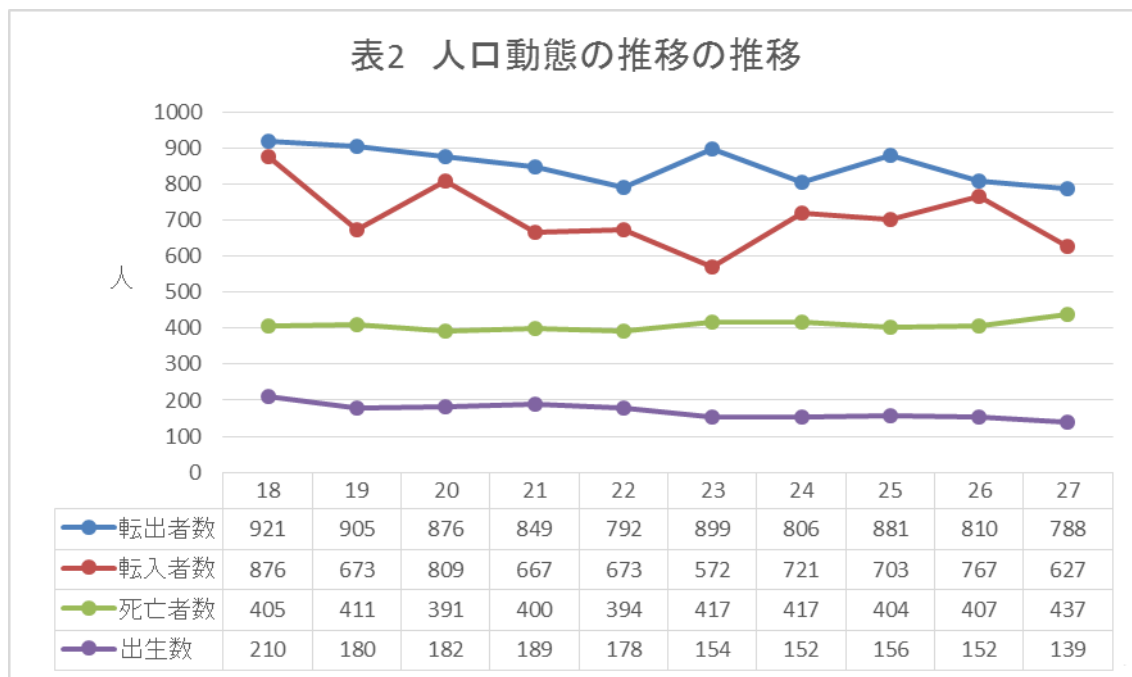
まずは那須烏山市が現在どのような状況にあるのかを資料を基に見ていく。まずは那須烏山市の人口の推移を見ていく。表1によると、平成7年(1995年)までは第2次ベビーブームの影響により人口を維持することが出来ていたが、それ以降は減少傾向にある。平成12年(2000年)以降は国勢調査によれば5年ごとに1,000人以減少し、人口減少が加速化している。社人研の推計では、今後も同程度の人口減少が見込まれ、平成52年(2040年)には平成22年度に対し約33.4%の減少、18,500人になるものと推計されている。



注：表1 国勢調査、推計については国立社会保障人口問題研究所及び総合戦略  
ただし平成27年以降は推計の数値とする

また表2からは出生率の低下、若年女性人口の減少の影響により、出生数が減り続けており、平成18年(2006年)までは約200人程度で推移しているが、今後は老年人口の増加

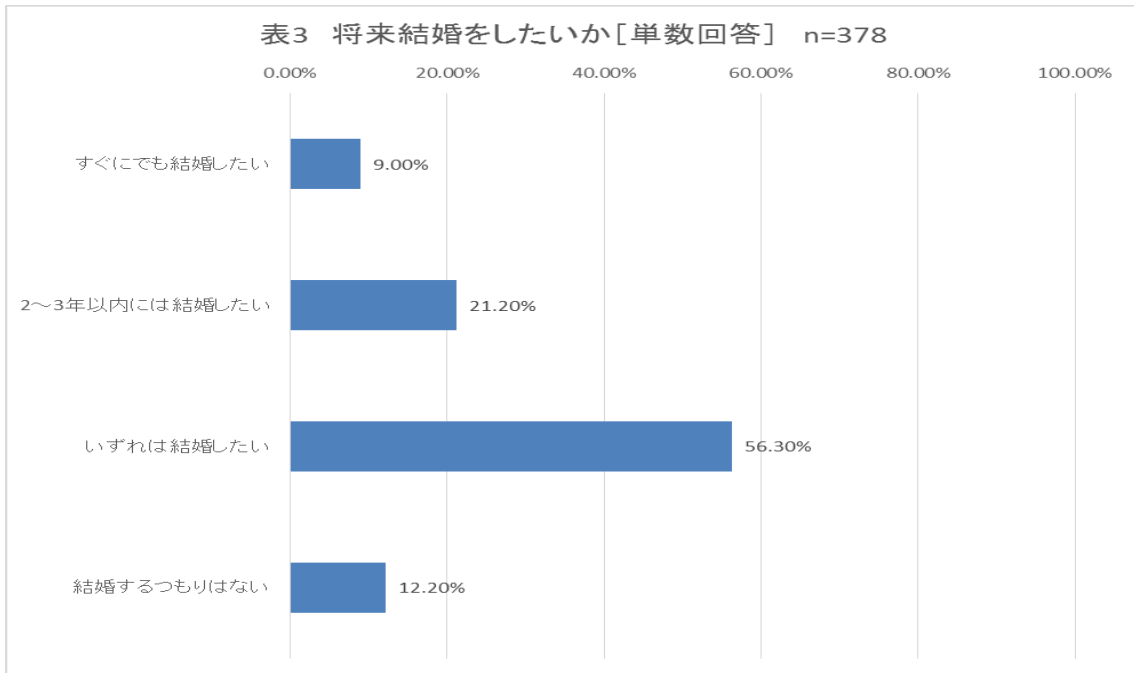
に伴い一層の「自然減」が見込まれる。那須烏山市ではこのような統計から、今後の人口減少に伴い、市内から人が消えてしまうことに大変焦りを感じている。人口を増加させるような政策を行うことも大切だが、このような厳しい現状から那須烏山市では現在の人口の維持の方に重点を置いて政策を考えている。この政策については第3節にて述べていく。



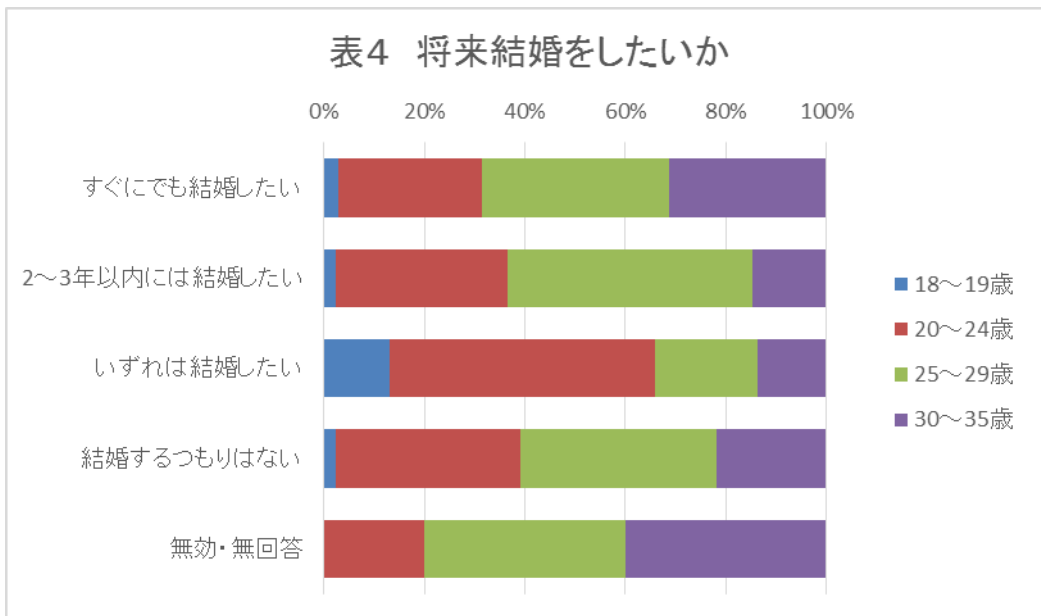
注：表2 人口動態の推移の推移 住民基本台帳年俣の概要

次に那須烏山市の出生率の減少について若い世代の現状を分析していく。実際に那須烏山市に住む若い世代や高校生が今後の生活に対しどのように考えているかを調査した資料から考察していく。

次の表3より、那須烏山市の若い世代や高校生の中で結婚するつもりはないという人が12.2%でそれ以外は結婚願望があるということはわかる。表4より、年齢別でみると、“すぐにでも結婚したい”回答者は25歳以上が約7割を占め、“いずれは結婚したい”回答者は24歳以下が6割以上を占めている。



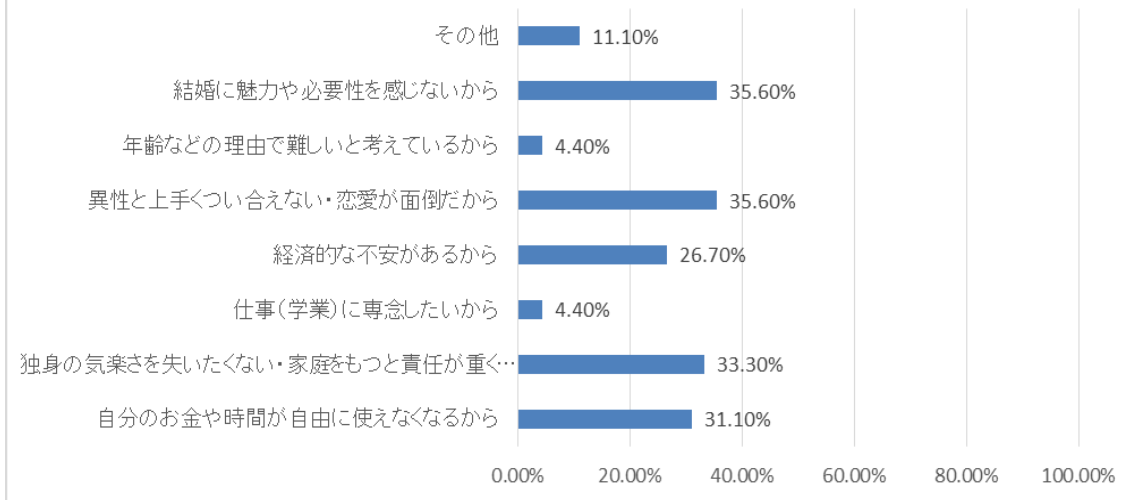
注：表3 将来結婚をしたいか[単数回答] 那須烏山市 若い世代や高校生のこれからの意識調査 2015



注：将来結婚をしたいか [単数回答] 那須烏山市 若い世代や高校生のこれからの意識調査 2015

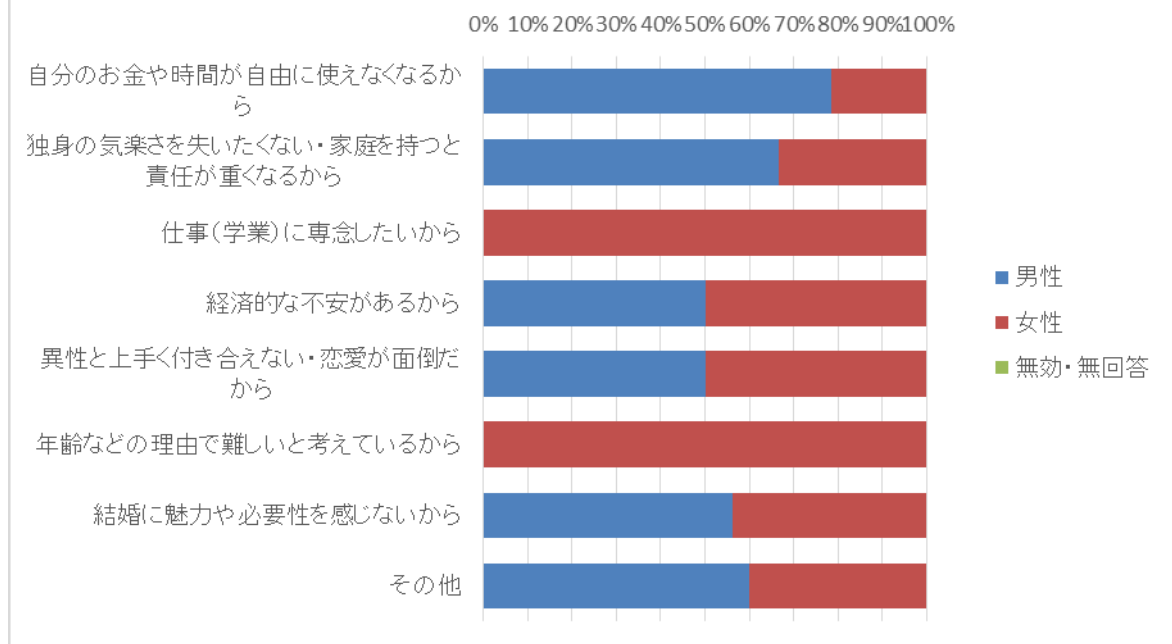


表5 結婚を望まない理由 [複数回答] n=45



注：結婚を望まない理由 [複数回答] 若い世代や高校生のこれからの意識調査 2015

表6 結婚を望まない理由[複数回答]



注：結婚を望まない理由 [複数回答] 若い世代や高校生のこれからの意識調査 2015

表5は結婚を望まない人から更にその理由を質問した回答で、表6はその理由を選んだ性別に分けたものである。表5より、自由に時間やお金が使えなくなる、独身だと気楽である、異性と上手く付き合えない、結婚の魅力を感じないなど、結婚に対してマイナスに

受け取っている人が多く見受けられた。経済的な不安がある人は 2 割りほどであった。独身であることにメリットを感じている人を多くいることがわかる。核家族化の影響もあるのか、結婚した後の負担が大きくなるのが大きな要因であると考えられる。

表 7 結婚・出産に関する指標

区分		全国	栃木県	那須烏山市	(参考) 全国順位
未婚率(25～39歳)	男性	49.80%	49.80%	57.70%	1599
	女性	37.70%	33.70%	37.90%	1290
平均初婚年齢	男性	31.1歳	30.7歳	32.3歳	1525
	女性	29.4歳	28.9歳	29.6歳	1298
出生順位ごとの母の平均年齢	総数	31.7歳	31.4歳	30.2歳	177
	第1子	30.6歳	30.1歳	29.1歳	474
	第2子	32.4歳	32.0歳	30.8歳	341
	第3子	33.4歳	33.4歳	31.4歳	106

注：表 7 結婚・出産に関する指標 那須烏山市役所 地域少子化・働き型指標

表 7 より那須烏山市は、全国、県と比較し男性の未婚率が高く、その影響により平均初婚年齢も 32.3 歳と高くなっている。一方で、出生年齢は比較的低い年齢であり、第 2・3 子出生も全国、国と比較し低くなっている。

これらの分析から、今後「自然減」を予測するほどの人口減少だけでなく、これからの時代を担う若い世代の約 12.2%もの人が結婚に消極的になってしまってきているという現状があることが分かった。

次に経済面から現状を分析していく。那須烏山市の現状として人口減少に伴い財源の確保が非常に困難になってきており、地方交付税交付金に頼っているということが実情である。

### 第 3 節 人口減少を食い止めるこれからの政策と今度の課題

那須烏山市総合政策課が打ち出している「まち・ひと・しごと創生総合戦略」とはどういうものなのかを見ていく。

那須烏山市の行政組織は市長部局、教育委員会、会計管理者、議会、農業委員会のほかに、選挙管理委員会、監査事務局、固定資産評価審査委員会、各付属機関からなっている。また、市のまちづくり基本理念として「～みんなの知恵と協働による“ひかり輝く”まちづくり～」というものがある。これは厳しい財政状況を直視し、那須烏山市の身の丈をしっかりと把握しながら、行財政面での自立や自然・歴史にあふれる豊かな環境の継承、将来の子供達が夢やほこりの持てるまちづくりに向け、市民と行政が知恵を出し合い、ともに新たな市を作りあげていこうとするものである。

総合計画の構成は次の表 8 のようになっている。基本構想は「まちの将来像・行政の将来像重点戦略」、基本計画は「まちづくり編。行政経営編チャレンジプロジェクト」、実施

計画は「基本計画を達成するための具体的な事業と財政の見通し」である。これは基本構想が平成 20 年（2008 年）から平成 29 年（2017 年）の 10 年間で目標が立てられ、基本計画は 5 年ごとに前期と後期に分かれている。実施計画については前期と後期の 5 年ごとをローリング方式で行われている。

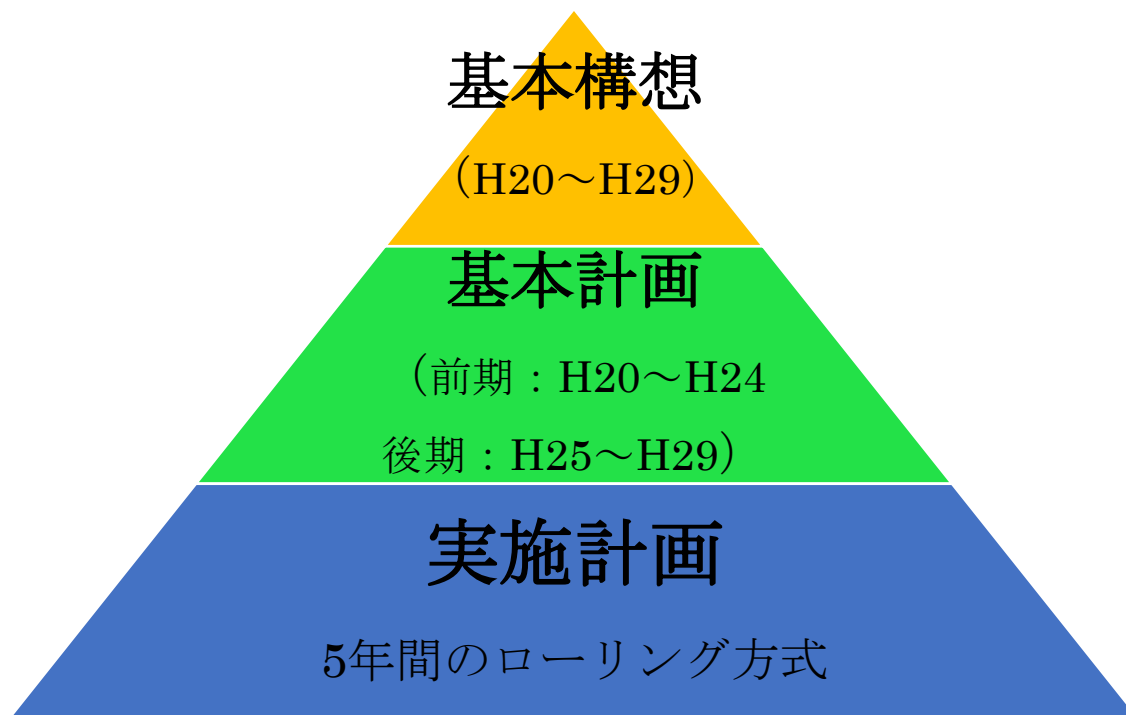


表 8

那須烏山市はまちの将来像を「自然」と「文化」と「活力」が調和した暮らしやすいまちとして、行政の将来像としては市民の目線に立ち市民に開かれた無駄のない行政を掲げている。

今後チャレンジしていくプロジェクトとして 5 つ挙げている。

1 つ目は「魅力あるまちづくりプロジェクト」である。雇用を創出し、定住促進を図るために、市の魅力を県内外に PR するとともに、有料企業の誘致や住環境の向上を推進するというものである。具体的な内容としては、企業誘致促進（定住促進条例に基づく企業誘致）、定住支援促進（定住促進住まいづくり条例に基づく定住促進）、都市開発の推進（補助事業を活用した道路整備）、再生可能エネルギーの推進（太陽光・太陽熱等、発電機器設置者への補助）、交流人口の増加の推進（JR 烏山線沿線整備及び観光振興）、農業の進行（集落営農、農地の流動化・新規就農者への補助）である。

2 つ目は「安心・便利な環境づくりプロジェクト」である。市民の安心安全な生活を確保する防災の環境づくりを進めるとともに、日常生活の快適性や利便性を確保する公共交通手段の充実や中心市街地の活性化を推進していくというものである。具体的な取り組みと

しては、安心安全の確保（災害対策や消防団活動の強化・LED防犯灯の整備）、循環交通網整備（デマンド交通エリアの拡大・市営バスの適正運行）、中心市街地活性化（空き家店舗の解消及び商業の活性化）である。

3つ目は「健康で元気いっぱいプロジェクト」である。子供から高齢者まで、奥の市民が健康で元気に生活できるように、健康づくり活動や各種検診の充実、子育て環境の整備を推進するというものである。具体的な内容としては、高齢者の生活支援（地域包括支援センター・多機能型福祉施設の整備）、子育ての環境の充実（放課後自動クラブの実施・こども医療費の助成費）である。

4つ目は「学習機会あふれるまちプロジェクト」である。那須烏山市の特色ある教育手法を継続し、学力アップを図るとともに、文化・スポーツを含めた教育機会の充実を推進するものである。具体的な内容は特色ある教育の推進（サタデースクール等の学習支援及びABC/R運動の推進）、生涯学習機会の充実（おたのしみプランの発行及び公民館講座の開催）、芸術・文化の環境整備（文化財の調査研究及び保存を実施）、スポーツの振興（体育協会等を活用したスポーツ振興）である。

5つ目は「市民協働によるまちづくりプロジェクト」である。積極的な市民への情報提供による市民参画を促し、市民と行政が協働する維持可能な自治体運営を推進するものである。具体的な内容としては行財政改革の推進（行革アクションプラン・定員適正化計画の推進）、民間活力の推進（外部委託の推進・公共施設の適正な管理）、地方分権への対応（市民参画の充実及び市政情報の発信）、持続可能な財政運営（中長期財政計画に基づく財政運営・税収強化）である。

これを実際に実行させるために、2016年3月に「まち・ひと・しごと・創生総合戦略」が策定された。急速な少子高齢化の進展に的確に対応し、住みよい環境を確保し、将来にわたり活力ある地域を維持していき、分析に基づいた効果の高い政策を集中的に実施し、客観的な効果検証により政策を改善していくものである。

人口のビジョンとしては若年層の人口流出に歯止めをかけ、若い世代の就労・結婚・子育ての環境を整備していくことと、魅力あるまちづくり、ひとづくりを進め、高齢者の健康寿命の一層の推進を図ることである。

この総合戦略にあたっての考え方としてはまず、人口減少に歯止めをかけるまちづくりを行いながらも、人口減少に適応したまちづくりも同時に推進していくことである。政策を設定して実施に移し、それを客観的に検証し、更なる改善に努めるというものである。

最後に那須烏山市が抱えている今後の課題点を述べる。

一つ目は那須町と烏山町の合併後の行政機関が統一し切れていないことである。那須烏山市が2005年10月1日に南那須町と烏山町が合併したのは、「平成の大合併」と言われ時期に値する。「昭和の大合併」は戦後の日本の自治体再編を目的に行われた。それまで日本に多く存在した“村”という単位は町や市に合併されたのである。「平成の大合併」は村や町が更に市に合併され小規模町村の多くが合併したが、経済的に安定した市町は合併する

ところが少なく、住民生活における地域の格差がむしろ大きく広がった。

那須烏山師是那須町と烏山町が合併後、市役所を旧烏山町にある庁舎で一つにまとめるという話で一度は決定したが、実質的にはうまく機能し切れていないという。それは旧那須町の住民に反対も多くあるからである。今まで近くにあった役場が合併によって遠くなってしまうことで、交通手段がない高齢者などが不便になってしまうからである。

しかし一つにまとめないことによって市の業務を二つの役場で行っているのは効率が悪く、町づくりの拠点としても機能しきれないという課題がある。市民と行政の話し合いが今後必要となってくる課題である。また現在の庁舎は耐震整備が不十分であるために災害時に拠点となると考えた時に、その機能を果たすことができるのかという不安も抱えていて、行政側は一つに統合する際に建て替えも考えている。

二つ目の課題は深刻な財政難である。人口減少により自主財源が極端に少なく、地方交付税や国庫補助金等の依存財源に依存している状況が続いている。

行政側の解決策としては、公共施設等の統廃合を積極的に行い、長寿命化と耐震性の確保を図る予定である。統廃合や用途廃止となった公共施設は売却や賃貸等の財産処分に努めて収入の確保に努める。また財産処分による収入については、公共施設の更新費用の財源として有効活用し、計画的な「公共施設整備基金」への積み立てを行う。

町づくりのために行政側としてのこれまでの取り組みとこれからの取り組みを述べてきた。しかし実際にこれらの活動が数値として結果が残せているかというところではない。実際には人口は減少の一途をたどり過疎化が進行してしまっている。

那須烏山市では人口減少を少しでも食い止めるための政策にシフトしている。前向きに町づくりを考え、人口減少にばかり目を取られずに現在の人口をどう維持するかに注目して政策を考えている。

課題点として挙げたのは行政の役割として担っていかなければならない点である。しかし実際に政策を実行に移し、人口減少を食い止めるための町づくりには市民の参加と積極性が不可欠となってくるのである。第4章では地域住民と行政が協働で行う、「地域住民による町づくり」について述べていきたい。

## 第4章 地域住民による「町づくり」とは

「町づくり」とはハード面とソフト面の両方からその地域に住む人々が“生きやすい”場所を目指すものだと考える。本論では町づくりの中でも特に地域住民が主体となって自分たちが住んでいる地域を盛り上げようとしている活動について述べてきた。

なぜならば、「町づくり」は行政と市民が協働で行うことが最も重要だと考えるからである。地域住民の現場の声を筆者の体験をもとに吸い上げることで、市民の団結力のすばらしさと行政の連携の必要性を浮き彫りにした。

町づくりの在り方は地域ごとによってさまざまな方法がとられる。地元の特産品から新しい商品を開発して成功している自治体や、地元の良さを活かした観光事業を開発している自治体など、地域にあった町づくりが求められている。

これからの日本には住民の理解と協力を行政がうまくまとめ、役所と市民の壁を超えた「町づくり」の姿勢が必要となる。人と人との繋がりが薄くなってしまっていると言われる現代の日本社会に改めて地域社会の重要性を説きたい。

町づくりとは何のために、誰のためにするものなのだろうか。その答えは、身近なところにあると考える。町づくりは建造物を増やしインフラを整え人口を増やすためだけに行うものではない。町づくりとはその町に暮らしていく人々の生活を守り、より良くしていくものだと考える。町づくりと聞くと、若者の人口が増加し町に賑わいが戻り、より住みやすく暮らしやすい町にするという像を想像しがちである。「少子高齢化社会」「限界集落」「過疎化」などのマイナスイメージを脱却し地域に活性化をもたらすものとも考えられてきた。

本論では前向きにこの問題と向き合いたい。現在その地域に住んでいる住民が住みやすく生きやすく、この地域にずっと住みたい、自分の住む地域に貢献していきたい、と思うような場所にしていくことである。地域の中のコミュニティがあることで生きていく場所と自分の存在価値を見出すことができるのである。そして現代の日本に不足している人と人との繋がりというものを地域がまとまることによって解決する一歩となると考える。

これを実現するためには住民が地域の活動に積極的に参加し、住民自らの経験を通して地域の中に居場所を見出していき、人と人との繋がりを形成することが必要である。そのためには、行政がそれに寄り添った政策をしていく必要があると考える。

私は本論で地域住民による町づくりを述べてきた。第2章では横枕青年団の活動を記載したが、ここでは横枕青年団を例として地域活動を実際に行う団体が如何にして活動を持続可能にすることができるかを考察する。

まずはメンバー全員が活動を行うためには目標を明確化し、全員がそれに共感している必要がある。集団行動を維持し続けていくのは難しい。ましてやNPO法人化もしていない横枕青年団の場合は利益を求めるわけでもなく、メンバーに働いた分の給料が発生するわけではない。またメンバーそれぞれの出席と行動に団体の運営や存続がすべて関わってくる。一つのイベントを開催するだけでも、告知から宣伝、準備、当日の会場設営、運営、

接客、片付けまでのすべてを横枕青年団が行わなければいけない。ボランティアにも協力はしてもらおうが、事前の打ち合わせを行い綿密に準備して当日細かな指示を出すのはやはり青年団員になる。イベントの利益は青年団の運営費になる。青年団員も普段は一家の大黒柱として働いている中、休暇を利用しながらこのような活動を続けていくのは本当に大変なことなのである。

彼らは共通して横枕地区の子供たちの思い出作りになるために、横枕地域の人にイベントを楽しんでもらいたい、という気持ちがある。そして活動している自分たち自身も楽しんで活動しているのである。同じ理念をしっかりと持った団体の活動には持続性が生まれ、自然にまとまりができるのである。

横枕青年団はこのような理念のもとに活動しているので、利益を求める法人化にはしないで横枕地域だけで活動を行っているのである。

さらに具体的にみていくと、横枕青年団が活動を続けてこられたのには組織の構造に答えがある。それはメンバー一人一人の役割を明確化していることである。横枕青年団は第2章でも記述したように団長、事務局長、副団長、団長補佐、事務局長補佐、などなど、適材適所に役割分担をしている。特に仕事を一番にうけおい、いろいろな人の力を巻き込むことのできる事務局長はキーパーソンといえる。団長がすべてを背負いすぎると負担が多くなり、団長に権限が大きすぎてしまうということも起きるが、事務局長というポジションにすることによって緩和されるのである。

また横枕青年団の活動の規模が大きくなるにつれて、人手不足や地域の人のためのイベントに地域の人が総出で手伝うということも起きかねないような状況になってきているため、今後も行政との関わりは必要になってくると考えられる。

第3章では行政の政策を述べてきた。行政の役割は市民全体の生活がよりよくなるために政策を実行していくことである。そのため市民に細かいケアが行き届かないことや、行政と市民との間でギャップが生まれてしまい、距離を感じてしまうことがある。

財政面での課題や人口減少による不安を抱えた行政機関はそれを解決するために策定を行い、目標を掲げて活動している。住民団体の活動では行えない、行政機関にしかできない役割である。しかし本論ではそこからさらにきめ細やかな住民への支援を提案したい。

那須烏山市市役所では実際に住民の声を取り入れるために市民へのアンケートを行い意識調査をしている。また総合政策審議会を行い金融機関、教育機関、NPO 団体などの代表者を市役所に招き、政策についての総合政策審議会を行っている。市民が中心となって話し合い、行政の職員も出席しているのでお互いの意見を交換することができる。

しかしまだその活動が実際の政策に反映されているかという点と難しい。総合政策審議会は筆者自身も議員として出席させて頂いたが、初対面の人同士が市の政策の資料を見ながら今後の市の政策について話し合うというのは難しいものがあった。市民が市の政策を資料をみて理解するための時間が長くなり、話し合いの時間がほとんど設けられなかったときもあった。市民側も行政に寄り添う姿勢を持つことが行政と市民の間のギャップを少し

でも詰めることができる一歩であると実感した。

住民と行政が互いに寄り添いあい、ギャップを克服することで協働した町づくりに近づくことができるのである。そしてそれが実現できれば、さらに人々が住みやすく、人が集まる町にしていくことができると考える。



## おわりに

本論は町づくりの在り方を実際の現地の声から地域住民による町づくりの力を述べてきた。従来の建物の建造やインフラ整備という大きな寄付金からなる町のハコをつくることではなく、人と人との繋がりから地域のコミュニティが生まれ、そこにまた人が集まるといふ町づくりである。

地域の活動に参加することは無償で労働力を提供するということと言い換えられる。しかし実際に活動しているとその労働力に見合った、地域の繋がりというものがある。繋がりの中で人は自分の役割や居場所を見出し、助け合い、協力するようになるのである。

このような住民の動きをサポートし、さらに町づくりに発展させて持続的な活動にするためには行政の力が必要となる。地域住民と共に行政の政策を考えていくべきである。那須烏山市には多くの地域住民の団体があるので、今後は行政との協働が期待される。

横枕青年団のように自分たちの住む地域を重点的に活動の拠点にしている団体もあるが、那須烏山市にはそれだけではなく、市内の団体を繋げてより大きなイベントを開催し、市民団体同市のコミュニケーションをとることが出来る場を設ける団体がある。

その団体の名はクロスアクションという。市内各地で点在している市民団体の点と点を繋げて一つの面にするのがこの団体である。那須烏山市内のネットワークを繋げる役割を果たすのが目的である。同じ市内にいながらもお互いの活動を知らなかった団体が出会い、新しい活動に繋がり、一つの団体では宣伝効果が弱くても沢山集まることによって集客を期待できるのである。市内で活動している団体で知らない団体はほとんどないという。

クロスアクションに関わっている人の中でも那須烏山市出身でない人がある。クロスアクションの活動に共感して宇都宮市民であったのに関わらず、積極的にクロスアクションの活動に参加している。

本論で例に挙げた活動はほんの一部でしかなく、それぞれの団体が様々な歴史を持ち、いろいろな人の気持ちを抱えて動いている。一つ一つの力は微力であっても、横で繋がり、行政と力を合わせることによって、よりよい町づくりに繋がるのである。

第1章では日本人のコミュニティ形成の歴史を説いた。現代の日本人におけるコミュニケーション能力が低下したというよりかは、コミュニケーションをとらなければいけない環境が少なくなってきたという現状と、それによって孤独死や自殺者が生まれている現実がある。

第2章では栃木県那須烏山市横枕地区の横枕青年団による活動をもとに、地域の中の人との繋がりを具体的に述べている。現代社会に必要な自分の存在意義、役割を実際に感じて生き生きと活動している人々の姿から学ぶことがある。

第3章は栃木県那須烏山市市役所の行政の視点からの町づくりの取り組みについて述べている。住民とはまた異なる視点と役割が行政にはあるのである。課題点として挙げられ

るのは市民の安全や利便性を確保するための建物の耐震性の強化や公共施設の廃統合である。国や県からの寄付金にほとんどの財源を頼っている現状から、身の丈に合った町づくりを策定している。

第4章は住民と行政の協働した町づくりの在り方を述べた。住民の町づくりとしては、団体の持続可能な活動がどのようにして実現可能になるのかを横枕青年団を例に述べた。活動が持続的に行われることによってはじめてコミュニティが形成され、そこから繋がりが更に深くなる。住民が町を作っていくという意味も含まれるが、住民自身が地域の活動に参加すること自体が町を活性化させるということに繋がってくる。行政の町づくりとしては限られた財源と資源の中で少しでも住みやすい政策を行っていかねばならない。そのためには住民の声をよく聞き協働で政策を行う必要があるのである。

## あとがき

国際学部に所属していながらもあえて日本の過疎問題に着目してきた。それは学生生活の中で経験の中から、日本人のアイデンティティを持っている自分がもう一度日本という国を見つめなおしたいという想いになったからである。

大学1年生の時にNPO団体のスタディーツアーに参加し、マレーシアの経済格差や不法移民の水上集落や強制退去の現状を目の当たりにした。マレーシアの首都圏の真ん中にある高層ビルに囲まれている森の中に、フィリピンからの不法滞在者が住む集落があった。私が訪れた前日に強制退去が行われ、19歳の女性は子供と母を強制連行され一人集落に残されていた。日本には知ることでできなかった現実を目の当たりにした。

大学2年生と3年生の時には所属していた国際協力のサークルの支援活動の一環でインドに訪れ、家の近くに学校がないために親元を離れて寄宿舎に住みながら学校に通う子供たちと触れ合った。そこでは国境を越えた人と人との繋がりを感ずることができ、自分の中で世界に対する価値観が大きく変化した。

このような経験から自分の無力さと世界の大きさを実感した。また、自分にできることも同時に学んだ。それは自分にできることは自分と出会った人との関係を大切にすることだということだった。一人の人間が出来ることは世界の大きさに比べたらとても小さい。しかし世界の大きさに圧倒されるのではなく、自分が日本に生まれ日本人として育ったことだけは確かなことなのだと改めて感じたのである。

日本人として自分が出来ることは何か、と考えた時にまずは日本を知ることだと考えた。そして行政学研究室で地域の人と交流することを選択し、その出会いから様々なことを学んだ。

研究室はメンバーにとっても恵まれたと心から思う。3年生の時は個性豊かな明るい先たちに囲まれ、同級生とはジョイント合宿や町づくり提案などを一緒に乗りえるたびに、熱く語りあえる仲になっていった。みんなで何日もかけて一つの提案を作る大変だったり、時には意見がぶつかりあったり、深い話になり朝まで話し込んだ日々が今となっては良い思い出である。

4年生の時は就職活動が本格的に始まり、その中で励まし合いながらそれぞれの研究に勤しんだ。フィールドワークやインタビューを中心にみんな様々な人と関わり合い、毎回のゼミでは生きた情報が飛び交い楽しかった。また院生の方々も一緒にゼミをしており、卒論だけでなく人生のいろんなことを教えていただくことができた。

後輩もジョイントや町づくりを少ない人数で一生懸命に取り組み、結果をしっかりと出せたことを見守っていた私もとてもうれしかった。2年生でありながらチャレンジ精神で3年生と一緒に頑張ってくれた後輩は、最初はゼミに誘ったことを後悔するほど授業やサークルなどの両立で大変そうであったが、その中で最後までやり切ったということが彼を成長させてくれたと感じた。

私の所属した研究室は年齢も国籍もバラバラだったが、とても仲が良く「家族」のような場所となっていたと思う。みんな温かく、それぞれを尊重しあった本当に居心地の良い空間であった。

また研究先の横枕青年団の皆さんには本当にお世話になった。半年間の活動は私にたくさんのお話を教えてくれた。本論には書ききれなかったエピソードも多くある。一番心に残っているのは、横枕青年団を私の出身地石川県と大学がある宇都宮市の次の第三の故郷と思ってほしい、いつでも遊びに来てほしいと言って頂いたことである。これからも横枕青年団の活動は応援していきたい。そして社会人になっても宇都宮市に就職が決定しているので、参加できるときは是非参加していきたいと考えている。

そして横枕青年団を紹介して下さった平林葉子氏と、平林氏を紹介して下さった同じ研究室の院生の渡辺裕介氏には本当に感謝している。渡辺氏は那須烏山市について研究したいが何も知らない状態からどうやって研究していくか先が見えず心が折れていた私に声をかけて下さった。そして平林氏にインタビューする時間も設けていただき、本論にも記載した貴重な体験ができたのである。

最後にこれまで指導教員として見守って下さった中村祐司先生に感謝したい。私は大学3年生の時の演習でレポートの半分を地図で埋めたような生徒であった。しかし先生は根気強く私と向き合ってくれ、この研究室に入ってから他の研究室では体験できない経験を沢山させていただいた。外部へ出向き地域のいろいろな人と関わりができ、体感して町づくりとはなにかを学ばせて頂いた。最後まで手のかかる生徒でご迷惑も沢山かけてしまったので、社会人として宇都宮に貢献できるようにこれから頑張っていきたい。

## 参考資料・文献

- ・伊佐 淳・松尾 匡・西川 芳昭 編著 (2007)「市民参加のまちづくり (事例偏)」
- ・伊佐 淳・松尾 匡・西川 芳昭 編著 (2007)「市民参加のまちづくり (戦略偏)」
- ・伊佐 淳・松尾 匡・西川 芳昭 編著 (2007)「市民参加のまちづくり (コミュニティ・ビジネス編)」
- ・石原 武政・西村 幸夫 (2010)「まちづくりを学ぶ」
- ・瀬沼 克彰著(1988)「住民参加の文化開発」(株式会社 学分社)
- ・乗本 吉郎著(1996)「過疎問題の実態と論理」(財団法人 富民協会)
- ・乗本 吉郎著(1989)「過疎再生の原点」(株式会社 日経経済評論社)
- ・橋本 和幸 (1995)「地域社会に住むーコミュニティとアメニティーー」
- ・蓮見 音彦 (1991)「地域社会学」
- ・蓮見 音彦 (1993)「地方自治体と市民生活」
- ・宮口 としみち著 (2003)「地域を活かすー過疎から多自然居住へー」(株式会社 大明堂)
- ・宮崎日日新聞社報道部 ふるさと取材班著 (1990)「ふるさとを忘れた都市への手紙」(社会団法人 農山漁村文化協会)
- ・山崎 丈夫 (2009)「地域コミュニティ論ー地域分権への協働の構図ー」
- ・山崎 丈夫 (2004)「地域コミュニティ論ー地域住民自治組織と NPO、行政の協働ー」
- ・山本 務著(1997)「現代過疎問題の研究」(株式会社 恒星社厚生閣)
- ・「那須烏山市総合計画後期基本計画」(2013～2017) 那須烏山市
- ・「那須烏山市総合計画 まち・ひと・しごと創生総合戦略」(2016) 那須烏山市総合政策課
- ・「本市将来像に向けての現状及び課題の把握・分析資料」(2016) 那須烏山市
- ・<sup>1</sup>地方自治制度の歴史 総務省  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/bunken/history.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.html) (2016年11月15日閲覧)
- ・総務省 過疎対策  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm)  
1 (2016年11月18日閲覧)
- ・